

彼らにも色々悩みがあり、孤立しているの
かもしれません。怒って説教ばかりでは心は
開かれてきません。心落ち着ける居場所がな
く不安になり、再非行をしてしまう青少年
女もいます。人は様々な環境で生きています。
更生とは「やり直すこと」なのです。更生
の文字を合わすと更生Ⅱ「甦る」とな
ります。

お釈迦様の教えに和顔施（なごやかな顔を
みせる）・眼施（優しいまなざしで接する）・
言辞施（やさしい言葉をかける）・心施（思
いやりをかける）・身施（自分の体で奉仕する）
があります。この教えは人を人として甦らせ
る修行なのです。

私は彼らを通してこの修行をさせていた
だいていることに感謝しています。人と出会い、

人とふれ合う、生かされていることに感謝し
て、これからも仏教精神に基づいた更生活動
を続けていきたいと思えます。

南無妙法蓮華經 合掌



2021年「第14回国連犯罪防止刑事司法会議」に
出席の筆者（左より2番目）。於、京都国際会館

聖訓カレンダー

解説

千葉市 本行寺 朝倉俊泰

七月

釈迦佛は靈山より御手をのべて
御頂をなでさせ給うらん

松野殿女房御返事

弘安二年（二二七九）大聖人五十八歳

弘安2年（二二七九）大聖人58歳
の時に、駿河国松野の領主松野
六郎左衛門行易の奥方に宛てて書
かれた御礼のお手紙の二節です。

松野行易は、娘が大聖人の有力
な信者である南条氏（上野殿）に

嫁いだことで大聖人に帰依し、教
えを受け、息子の一人はのちに出家し、六老僧の一人となった日持上人です。また行易の死後はその奥方が信仰を受け継ぎ、供養の

品々を贈り続ける等、一族をあげ
て信者となりました。

この松野氏へのお手紙は『松野
殿御返事』として断片が現存し
ており、大聖人のご真筆であると
考えられます。

麦・芋・瓜等の供養への感謝と
ともに、晩年の日々を送られた身
延山の自然の様子を「深山幽谷で
はあるが、法華経が正しく修行さ
れているこ身延の地は、まるで

インドの靈鷲山や中国の天台山の
ようです」と述べられました。

修行の力の源となる食料を供養
した功德は大変尊いものであり、
修行僧に身をやつした帝釈天に我
が身を捨てて供養した兔が、その
果報で月に住むようになった説話
をもとに、『法華経』を正しく信
仰する者には釈尊が靈鷲山から御
手をのばして頭をなでてください
ましょう」と述べられました。